



愛知淑徳大学

## ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

## Newsletter

第9号

URL=<http://www.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

発行年月日：2000年5月26日

〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9

Phone 0561-62-4111 EX 498

FAX 0561-63-9308

E-mail : [igws@asu.aasa.ac.jp](mailto:igws@asu.aasa.ac.jp)

愛知淑徳大学が男女共学になって6年目にはいり、学部を増設などで本学はあらたな展開をみせている。今年、2000年には新校舎8号棟が完成、都市環境デザインコースが現代社会学部に充足し、建築・環境デザイン、住居領域の大学教育が可能となった。その専攻領域にふさわしく校舎も斬新である。

その新築8号棟プレゼンテーションルームの「こけら落とし」ということで、場所のお披露目も兼ねて4月24日に田中恒子先生（大阪教育大学教授）をお招き「居住空間とジェンダー」の講演会を開催した、本学助教授の渥美正子さんが解説、司会をした。90名におよぶ参加者で成功裡に終了した。またこれに先だて1月17日ジェンダー・女性学研究所主催第6回定例研究会では長年アメリカ・カリフォルニア大学で分子生物学、遺伝子工学の領域で教鞭をとっておられた本学文学部教授、堀田康雄先生による「遺伝子情報とジェンダー」についての報告と質疑応答が行なわれた。

さらに4月25日にはイギリス、ブルネル大学教授スポーツ社会学専攻のジェニファー・ハーグリーブス教授による「スポーツとジェンダー」というテーマの特別セミナーが開催された。本学小林学長の旧友でもある明治大学の寺島教授による紹介、解説、逐次通訳付きで、日本ではあまり研究者もいないスポーツのジェンダー分析が紹介された。東海地区のみならず、関東、東北からもこの領域に関心のある教育者が集い、語り合った。以下にこれらのセミナー内容の簡単な紹介をする。

## 住み方はつくるもの

住居を考えるということは、イコール暮らしを考えることです。住居は、自分が主人公となり自分自身で創りあげていくものです。つまり、「住居学」とは、自分自身の毎日の生活そのものを研究対象とする科学で、つくられたものをチョイスするという消費者の視点からだけでなく、生活者の視点で考えていく学問なのです。社会性のある科学といえます。

着ることや食べることに比べて、住むことというのは軽視されがちであるのが現状です。中学や高校の授業でも、被服製作や調理実習はしても住居について考える時間は少ないのです。衣食住のなかで、住は最も生活がにじみ出ているものといえるでしょう。無意識に生活していたら、それですんでしまう。どのように住むかを考えるのは、私たち自身です。住まいに愛着をもち、どう暮らしたいのか、どう住みたいのかを明確にし、創造的で豊かな生活空間を考えていくことはとても大切なことなのです。

「住み方調査」をしてみると、もっと広い家に住みたい、もっと静かなところに住みたいなど生活者の住要求がたくさん出てきて、そこには「型」があることがわかります。同じ空間で生活する場合でも、その空間が与えられた場合と、自らがそこに住みたいと要求して得た場合とでは、住み方に大きな違いがあります。求めて得た空間では、空間を改善していこう、生活を改善していこうという意欲がみられます。自らが生活改善の主体と思ってない人は、空間や生活を改善するきっかけを与えても全く住み方は変わらないのです。

どう住みたいのか、どう暮らしたいのかという考え



田中恒子先生

の根底には、どう生きたいのかということがあります。住み方ひとつで、生き方でも表現できるのです。

## いろいろな住まいのかたち

生活がそのまま住居に表れるということは、歴史からも読みとれます。四つ間取り農家や長屋型町家などの伝統的な住宅は、部屋と部屋が襖一枚で仕切られているだけで個人のプライバシーなど存在していませんでした。家父長的家族制度のもとでは、父親は家族とは別に寝ていて、夫婦同室就寝でもなければ子ども部屋もありませんでした。また、接客が重視され、条件の良い部屋は客のためにありました。しかし、現在の家族に不足しがちなコミュニケーションは充分にありました。現在は「nLDK」型の間取りが主流ですが、家族の多様化を反映した住宅も出現しています。山本理顕さんと山本厚生さん設計の住宅を紹介しましょう。前者は、個々の部屋に外からの出入り口がある個別分散型の住まいです。後者は、居間・台所を通らないと2階の子ども部屋に行くことができません。子ども部屋には、ベッドしかなく勉強は家族の図書室でします。衣類も個々の部屋にではなく家族皆が同じ場所に収納し、共通の更衣室で着替えるというユニークな生活スタイルです。いずれも、家族に対する生活思想が強く反映した対照的なプランです。

## 性別役割分業意識が反映している居住空間

住宅設計に見えるジェンダー意識

台所は女の城か

台所は、本来作業する場です。合理的な台所は必要ですが、華美な台所は必要ありません。最近はやりの豪華なシステムキッチンには、いったい誰のためのものなのでしょうか。家事全般を請け負っている主婦への

ご褒美であるのか、または夫が家事をしないことへの免罪符となっているのでしょうか。どちらにしても、日ごろ自分が家事をしなくても、美しいキッチンを妻に与えれば、文句をいわれないだろうという発想のためにように見えます。また、あるパンフレットに、「システムキッチンによって、夫が台所に入らなくなりました。」とありましたが、それでは、女性だけが使う台所なら汚くてよいのでしょうか。こうした男女差別がよく見られます。売り出される商品に対して、使用者の立場で暮らしの視点から見抜くことが大切です。

カウンターテーブルはどうなったのか

カウンターテーブルはかつてのCMにあった、「あなた食べる人、私つくる人」をかたちにしたようなものです。このかたちは、「妻はつくる人、夫・子どもは食べる人」という役割分担型の家族関係を絵に書いたようなものです。またカウンターテーブルは、家族がお互いに顔を見ないで食事をすることに、家族が横並びの関係であることも示しています。

押入れは有効か

押入れという収納空間は、布団などの寝具類を収納する以外には全く役に立たないのです。しかし、戸棚型、引出し型の収納にすると、お金がかかるので、押入れがいつまでも残っています。結局押入れの中のモノを探すことは、女性の仕事です。もっと使いやすい形態の収納を増やすべきです。家事はアンペイドワークであるという考え方があるから、いつまでも、住宅から押入れが消えないのではないのでしょうか。

家事室は必要か

男性が書斎を持っていることを前提として、「“女性も”書斎を持ちましょう」という言い回しには、男性優先の意識がうかがえます。女性のための個室なのか、それとも家事のための部屋であるのか、どちらも一見女性のことを考えて一つの部屋を設けようとしているのですが、実際は、北側でもどんなに狭くても良とされてしまうことが多いのです。男性の書斎なら決してそんなことはないのです。わざわざスペースを設けなくても、家族の集まる空間の中に個人のプライベートな収納空間があればよいのではないのでしょうか。

住み方に現れているジェンダー意識

食卓につく位置を思い出してみよう。おそらく母親は台所から一番近い位置に座ることが多く、子どもはテレビが一番良く見える場所に座ることが多いでしょう。寝室についてもいえます。寝るときのことを思い出してみると、ひとりの時、夫婦一緒の時、妻と子どもが寝る時、家族がいっしょに寝る場合と、様々ですが、夫が子どもと一緒にというパターンは少ないでしょう。妻が子どもに添い寝をしますが、夫はあまり添い寝をしません。育児は女の仕事と考えられているからではないのでしょうか。

住居管理におけるジェンダー意識

住居の掃除は、ほとんど主婦がやっています。自分



の部屋は自分で掃除して、出したものは、自分で元の場所へ戻すことは当たりまえのことです。しかし、そんなことを言っても、「僕は気にならない。気になる人がすればいい。」といわれてしまうのです。職場で同じことが言えるでしょうか。職場も家庭も同じなのは、家事を女性に押し付ける怠慢な態度に他ならないのです。整理整頓や掃除は、暮らしの中の基本的な部分なのだから、より快適に過ごすために、個人の仕事として意識するべきことでしょう。

## 住み方は生き方の表現

自己表現としての衣生活・食生活・住生活

住生活は、衣生活や食生活と同じく、自己表現の一つです。例えば、似合う洋服を着たいとか、健康に気をつけた食事をしたいといったことが、衣食に対する表現でしょう。住まいも、その人の住み方を見れば、どういう生活思想をもっているのかがわかります。住み方は、住み手の暮らし方の表現であり、生き方の表現でもあるのです。

丁寧に住む

わたしは、美しく住むことにこだわっています。簡素さという贅沢、愛着という豊かさを大切にしながら、丁寧に住みたいという哲学をもっています。すっきりと暮らす基本は、モノがあふれる生活をしないことです。置く場所をきめてからしかモノを買わない、衝動買いをさせるしくみにのらないことです。現代の浪費的な生活様式は、暮らしを乱雑にしていることを認識しなければなりません。わたしは、洋服は流行や体型に左右されないシンプルなものを、充分吟味して選びます。タンスのこやしになっている洋服には、洋服の値段に収納空間料も付いているのです。「収納スペースをこえたモノは持ち込まない、必要最低限のモノで暮らす」という考え方が大切です。そうすることによって、モノに愛着をもつことができます。

生活を創るという創造行為のおもしろさ

どんな住宅事情のもとでも、楽しく創造的に暮らすことができるはず。年齢とともに変わり続ける自分を楽しみながら、生活そのものである住まいを創ることのおもしろさを感じてほしいのです。女性だけが、生活に関わっているわけではありません。男性であっても女性であっても、生き方の表現としての住まいを大切にしてほしいのです。

### 【田中恒子先生 主な著書】

- 『現代の生活空間論 上』勤草書房(1974)(共著)
- 『住居学ノート』勤草書房(1977)(共著)
- 『現代生活と婦人』大月書店(1981)(共著)
- 『住宅政策研究5 住教育-未来へのかけ橋』ドメス出版(1982)(共著)
- 『住まい再考-豊かな暮らしへの提言』彰国社(1983)(共著)
- 『新しい住生活』連合出版(1983)(単著)
- 『住まいを見直す』大月書店(1984)(共著)
- 『恒子のリビング手帖』日本生活協同組合連合会(1986)(単著)
- 『新建築学大系 7住居論』彰国社(1987)(共著)
- 『新・住居学』ミネルヴァ書房(1989)(共著)
- 『恒子とRANKOの住み方ノート』かもがわ出版(1989)(単著)
- 『日本女性生活史 第5巻現代』東京大学出版会(1990)(共著)
- 『恒子の子育てノート』かもがわ出版(1990)(単著)
- 『住まいと子育て』新日本出版社(1991)(単著)
- 『恒子とRANKOの花ぐらし』かもがわ出版(1995)(単著)
- 『育ちあいの家庭をつくる』かもがわ出版(1997)(単著)
- 『家族と健康にやさしい住まい-家づくりは夢づくり』(1998)(共著)

### 【略歴】

1941年 大阪に生まれる  
1963年 大阪市立大学家政学部住居学科卒  
現在、大阪教育大学教授  
専門分野：住居学、家庭科教育

## ジェンダー・女性学研究所主催第6回定例研究会報告

2000年1月17日、本学文学部堀田康雄教授をお招きして「遺伝子情報とジェンダー」のテーマで生物学遺伝子組み換え情報とその領域の関連を講演していただき生物学的性、そしてジェンダーの境界について考察が行なわれました。

生物学的に性(Sex)を区分するとMale(オス・男)とFemale(メス・女)に分けられる。我々の体は母方と父方から半分づつ染色体をもらい $22本 \times 2 = 44本$ と更に男性はXY、女性はXXの性染色体をもっている。染色体は我々の遺伝子の全てをもっている。遺伝子組み換えや生殖細胞は体内では男は精巣で女は卵巣で高頻度につくられている。また我々が生殖細胞をつくるときには染色体が半減する。つまり減数分裂が行なわれるのである。例えば子どもをつくるとき、パン酵母では普通2倍体で培地の中で体細胞分裂をする。1個の細胞が2個になる型の複製をして増えていく。環境が悪くすれば減数分裂を起こし4個の胞子を作って悪環境に耐える。再び環境が良くなれば胞子は発芽し相手の細胞(a又は)を見つけて接合し2倍体となり元に戻る。つまり1倍体=半数体の酵母(分裂酵母)は環境が悪くなると相手と接合し(h+又はh-)ゲノムDNAを複製して減数分裂を行い4個の胞子を作り出す。環境が良くなれば、各々の胞子は発芽して体細胞分裂を続ける。また減数分裂では必ず相同染色体間=相同遺伝子間に組み換えが起こる。減数分裂は植物でも動物でも生殖細胞が形成される時に必ず起こるので生殖細胞では多くの遺伝子の質や配列に変化が生まれる。更に母方と父方の対合した染色体の分配と受精による新半数セットの合流によって起こる変化の2つが子が親に似ない原因になる。更に母親由来遺伝子が発現するか父親由来の遺伝子が発現するかは遺伝子毎に異なり発生の段階や組織によっても異なるので子どもは親に似ない面を多く持つことになる。また組み換えの起きない染色体上の領域や遺伝子もあるので親に似ている面も多くある。植物には雌雄同株同花、雌雄同株異花、雌雄異株があり、花粉を作るもの、精子を作るもの、胞子を作るもの等がある。これら生殖器官は成長の終点、時には死ぬ直前に分化する事が多く受精が起こりやすく、子孫が悪環境から守られ適切な環境が戻り発芽した時にどんどん成長できる様に時期を見計らって形成される。酵母も植物も生殖細胞を通して自分の遺伝子を生存させ、継続させる様に体を維持し機能させている。いずれにしても遺伝子組み換えによって私たちは敗退せず便利に生活することができる。もし遺伝子組み換えがなければ敗退したり不便になったりする。また生物の中にはオスでもなければメスでもないものも存在する。1ミリぐらいの土の中や水たまりの中にいる寄生の線虫は一つの個体でありながら両性を持っている。例えばカタツムリ、ゴカイ、ヒル、フジツボ、ホヤ、ミミズ等はオスでもありメスでもある。これらは成熟すると最初に精子を排出する。精子は水の中を泳ぐ。その後半日くらい経つと卵子を出す。同じ個体から精子と卵子を出すことができるが同じ個体間では受精をしない。生き残るためには精子は他の線虫の卵子を受精しなければならない。また雌雄異体、オスとメスの体の大きさによって性を交換する生物もいる。例えばペラの類では一番大きい個体だけがオスになり精子を出す。他はメスになるが一番大きいオスを殺したり捕ったりして不在にするとメスの中で一番大きいのがオスになり精子を作り出し他のメスと受精する。クマノミは最大個体だけがメスになる。この最大のメスがなくなるとこのメスの次ぎに大きいオスがメスになる。或いはイソア



(2000.1.17 講師：堀田康雄先生)

カガエルは温度で変化する。カメやワニは卵の環境温度が高くなるとオスになる。5度~10度位ではメスになる。夏に産まれてくる卵はオスであり温度が低いとメスになる。或いは節足動物は体節の数が20以下だとオスになりそれ以上になるとメスになる。大きいメスに餌を与えなければ体節の数が減り小さくなりオスになる。複数のメスと一緒にして餌を減らすとどんどんメスはオスになり一番最後まで多く卵を持っていたメスだけがメスとして残る。この様に性の転換にもいろいろある。メダカに男性ホルモンを与えるとオスになり女性ホルモンを与えるとメスになる。処理を繰り返す毎に性は何度でも転換する。人の精子の頭のなかには半分の染色体22本にプラスXかYのどちらかが入っている。Xを持った精子が受精すれば女になる。Yを持った精子が受精すれば男になる。性の決定は精子がする。卵子は精子の100倍の大きさがあり人の肉目で見ることが出来る。同じ量のDNAが入ってはいるけれども精子と卵子ではサイズ、形、大きさは全く違う。

生殖細胞にも核他にミトコンドリアがあり、DNAを持っている。受精の時に精子のミトドピースに集められたミトコンドリアは卵子に入らないので、受精卵とそれから発生する個体のミトコンドリアDNAは母親由来のものだけである。これが母性遺伝と言われる現象であるが、ミトコンドリアDNAの性質も寿命や病気に関係している。チンパンジー、ボノボ、ヒトの遺伝子の98%のDNAは相互に同じである。ミトコンドリアの遺伝は母親からだけによって遺伝するため遺伝の重要性は母親と父親の半々ではない。核に関しては半々であるかもしれないが細胞質のミトコンドリアの遺伝子は母親からしか伝わらない。

遺伝子の変化に由来する進化は何万年も経なくても、数世代で変化が現れうる事が淡水や海水に棲む魚類で示されてきた。独立性や依存性という性格は性差の他に自分の遺伝子を次ぎの世代に伝えることにおいても大切な役目となってきた。その進化の過程でメス、オスの集団内の個体関係、さらには男・女の社会的関係であるジェンダーが形成されてきた。哺乳類でも何世代かで速やかに進化が起こるかどうかはまだ知られていないが、もしそうだとするとジェンダー問題も生活環境を整えれば、遺伝子レベルから予想外に早く解決が見られる可能性がある。人間の男女関係は学習を主としているので変化をさせることができる。遺伝子的特性でなければその関係は事態や時代とともに容易に変化する。

すなわち生物学的に事象を見れば変化は常にみられるのであり、学習によるジェンダー関係の変容もまた当然おこるものである。

文責 ジェンダー・女性学研究所

## 21世紀における女性のスポーツのあり方

本学助教授 松田 秀子

20世紀最後の五輪となるシドニーオリンピックの聖火がオリンピア遺跡のアテネで、今日（5月10日）採火され、聖火リレーが始まりました。近代オリンピックは1896年にギリシアのアテネで開催されたのが始まりですが、当初は女性の参加は認められず、1900年のパリ大会から参加できるようになりました。この大会の参加者はわずか11名でしたが、1996年に開催されたアトランタ・オリンピックでは約3700名の女性選手の参加があり、全選手の3人にひとりが女性という時代を迎えるようになりました。

オリンピックに限らず、女性は歴史的にみると長い間、社会的な差別などにより運動・スポーツから遠ざけられていました。しかし、現代社会においては余暇時間の増大、女性の社会進出などに伴って、女性のスポーツへの参加はめざましいものがみられます。今回、ジェニファー・ハーグリーブス教授の「スポーツとジェンダー」のお話を聞く機会に恵まれ、改めて21世紀に向けての女性のスポーツの在り方について考えさせられました。

セミナーの内容は、歴史的な背景から女性のBodyを9つの視点でとらえることにより、19世紀の女性スポーツのさまざまな問題点について次のように指摘されました。

## 1 The Conspicuous Body

イギリスの上流階級の女性がパスル・スタイルでテニスを楽しんでいる様子などから、女性のスポーツが男性の目を惹くものとしてとらえられていた。

## 2 The Medicalized Body

女性のエクササイズは、健康・セラピーの為であり活発な身体運動は遠ざけられていた。

## 3 The Disciplined Body

上中階級の女性はスウェーデン体操を行うことによ

り、身体訓練がされていた。

## 4 The Working Body

身分の低い、労働者階級の女性はレスリング、ボクシングなどの格闘技を生活のために行っていた。

## 5 The Natural Body

女性の身体は良い子どもを生むためのものであり、伸びやかな身体が要求されていた。

## 6 The Sxexualized Body

写真家がとらえた女性スポーツを例に挙げ（オーストラリアのエリート・スポーツ・ウーマンのセミヌードのカレンダー、クリケットの世界チャンピオンなど）、女性スポーツが男性のスポーツの飾りとしての存在になっていることが懸念される。

## 7 The Hard Body

皮下脂肪がとれた身体が目されるようになり、女性スポーツが見られるということ意識したものに変わり新しい表現の方法がでてきた。

## 8 The Abused Body

エクササイズやダイエット、更にはドラッグの問題など女性の身体に過度な訓練が行われるようになり、それに伴って1)拒食症 2)生理が止まる 3)骨粗鬆症の3つの弊害が表れている。

## 9 The (Im)Perfect Body

ワシントンマラソンに86歳の女性が完走したこと、パラリンピックを例に挙げ、今後のスポーツにおける女性の身体のとらえかたについて示唆された。

以上、簡単にセミナーの内容をまとめてみましたが、21世紀に向けてドーピングの問題など、女性スポーツを取り巻くさまざまな問題が予想される中、ジェンダーについて考える必要性が高まるのではないかと思います。

## スポーツとつくられる女性像

本学非常勤講師 星山 幸子

近年、スポーツをすることやスポーツ選手のあり方に関連して、スポーツの商業化やスポーツ選手の倫理について問われることは多々あります。しかし、とくに女性に焦点をあててスポーツが語られることはあまりありません。それは、ジェニファー・ハーグリーブス教授が「男子スポーツのお飾りとして女子スポーツがこれまで位置づけられてきた」と述べられたように、女子スポーツが副次的な位置にあることにその要因があると考えられます。このような、男性が主で女性が従という考え方は、スポーツに限られたことではなく、ましてや古くなった考え方でもありません。むしろ、それは、現在の私たちの生活にも見受けられるジェンダー観と言えます。

ハーグリーブス教授のセミナーでは、19世紀以降のヨーロッパにおけるスポーツの歴史のなかで、女性がどのような役割を果たしてきたのか、それぞれの時代が要請する女性像が女子スポーツのなかにどのように象徴的に表れてきたのか、スポーツをする女性に求められているものは何かなどについての発表がなされました。そのなかでは、とくに女性の身体（body）がスポーツをとおしてどのように表れてきたのかに焦点があてられました。

ここで論じられたスポーツをする女性の身体の表象性は、歴史をとおして共通するジェンダー観とその時代が求める女性像との接点であると考えられます。つ

まり、ハーグリーブス教授が「女性の身体を女性自らが所有しているかどうか問題である」と指摘されたように、男性あるいは男性社会が女性の性をコントロールする状況が19世紀から今日に至るまでスポーツをする女性の身体に表れてきました。すなわち、スポーツをする女性の身体とは、男性の目を楽ませるものであったり、集団で訓練や道徳教育を受けるものであったり、子供を産むための身体であったり、商品として女性の性的部分が強調されていたり、過度の運動やダイエットにより疲弊した身体であったりしました。それらはそれぞれ、今日の私たちのなかにある女性像でもあります。その意味で、19世紀以降のスポーツに表れた女性像を改めて見直すことによって、私たちが生活する現代に認知されたジェンダー観のなかで私たちが見過ごしている問題に気づくことができるのではないのでしょうか。

このように、女子スポーツの歴史に見るジェンダー観は単に過去における静的な問題としてではなく、現代のジェンダー観にも通じる問題として考える必要があると思います。つまり、女性が主体性を獲得することがスポーツをする女性の今後の課題であるのと同じように、個々の女性や男性が自らの性（セクシュアリティ）をコントロールすること、そして、それをそれぞれの生活のなかに生かしていくことが私たち個々人の共有しなければならぬ課題と言えます。

## 女性のアイデンティティ；スポーツと競技のはざままで

日本体育大学 伊藤紫乃

女性スポーツの社会的・歴史的背景は大変興味深く、また、女性スポーツの在り方への問題提起には、強い共感を持ちました。Abused bodyを目指すために引き起こされるFemale athlete triadは、スポーツの現場において私がまさに今、直面している問題です。

私は、大学の陸上競技部女子長距離選手のコーチをしておりますが、競技会に参加をして、まず気がつくことは、女性の監督・コーチの数が極端に少ないことです。これは、大学のみならず、中学校から実業団チームに至るまで、女性が指導をしているチームは数えるほどです。また、女性の身体的な特性に関する理解不足により、現在でも「月経があるのは、練習が足りないからだ。」という考えをお持ちの男性監督がいっぱいなのが事実です。ハーグリーブス教授がふれておりました月経障害、摂食障害、骨塩量の減少は、世界のエリート選手のみならず、今や日本の中学生レベルでもみられる現象です。セミナーの中でも取り上げられていました体操競技同様、陸上競技の長距離選手誰もが、太ってはいは走れないからとダイエットを実行しています。オリンピックのマラソンランナーも、中学生の陸上部員も体重に対する意識レベルは同じです。コーチから言われて1ヶ月で4キロ減量をした、また、実際は痩せ過ぎているのに自分は太っていると思ひ込み、摂食し、月経障害になってしまった中学生も少なくありません。競技で良い成績を上げ、充実感を得る選手は、ほんの一握りであり、その陰で多くの女性達が身体的、精神的に傷つき、スポーツから去っていくという事実にもっと正面から向き合わなければならないと思います。

競技スポーツにおいては、実際の競技に関わるコーチングと、パフォーマンスを様々な角度から分析する研究とが、なかなかリンクできていないのが現状です。私も、自分の競技経験だけで選手の心をとらえることに限界を感じ、経験と研究をうまく交えたものをフィードバックしたいと考えておりました。そのような時に、JWS（スポーツに関わる女性を支援する会・小笠原悦子代表）と出会い、女性スポーツに関する資料を作成するプロジェクトに参加させていただくことになりました。プロジェクトでは、学校体育、生涯スポーツ、女性のからだ、メディアとスポーツなど、委員それぞれの専門に関連した幅広い分野において、データをまとめております。このような、調査・研究から得られた科学的知見と、実際のパフォーマンスとをうまく連携させるとともに、現場に立つ女性指導者を一人でも多く増やすためにも、今後も更に活動を続け、広

めていきたいと考えております。

最後になりましたが、セミナーを企画していただきました貴研究所、ならびに國信潤子教授に感謝いたします。これからも、このような場が持たれることを期待しております。



寺島善一先生（左）・ジェニファー・ハーグリーブス先生（右）

### Jennifer A. Hargreaves先生の紹介

PhD; MA. Cert. Ed. Ac. Dip

Professor of Sport, Sociology of Sport  
Burnel University

#### < 学歴 >

1948 ~ 55 Beckenham Grammer School for Girls

1955 ~ 58 Dartford College of Physical Education

1975 ~ 77 London University Institute of Education

#### < 著書 > 単著 (last 10 years)

1994 Sporting Females; Critical Issues in the history and Sociology of Women's Sport London, Routledge

1994 North America Society of Sociology of Sport より Book Award を受賞

1997 Muscles, Metaphors and Myths; Examining Women's Sporting Bodies Roehampton Institute Publications

2000 Heroines of Sport; The Politics of Difference and Identity, Routledge,

共著論文多数

#### < キーノートレクチュア >

1998 I. O. C. 総会 "Women and Sport" を筆頭に25回の国際会議において講演

#### < 講義 >

2000 明治大学客員教授として講義をした。他29大学において講義

# 住 ま い は 家 庭 生 活 の 「器」

～家事空間をジェンダー間コミュニケーションの場に～

本学助教授 渥美 正子

1970年以降、家族は世界的規模で揺れ動いている。まず、かたちの上では、家族規模の縮小と家族構成の単純化（細分化）が進んでいる。平均世帯人員は、1955年までは5人前後で安定していたが、95年には3人を割るまでに減少した。戦後大都市部で大量に出現した、夫婦と未婚の子どもだけの核家族4人世帯は漸次減少し、単独世帯、夫婦のみ世帯、単親世帯が増加して、家族形態は多様化している。また、意識面での多様化も著しい。伝統的な結婚観・家族観は、規範としての拘束力を弱め、女性のライフコースが多様化してきた。今後、DINKS（Double Income No Kids）やDEWKS（Double Employed With Kids）をはじめ、各年齢層におけるシングル世帯は更に増加していくであろう。共棲や血縁、婚姻制度にこだわらない新たな家族形態も現れている。

こうした家族形態の変化は、多様なライフスタイルを生み出しているため、家族生活を受け入れる「容」としての住まいも、多様化が求められているのである。戦後住宅モデルの代表である「nDK」「nLDK」型は、標準的核家族4人世帯・専業主婦を前提にしたものである。従来、標準といわれた核家族に当てはまらない様々な家族に見合う住空間をどのように提供していくかは、住宅計画の新しい課題である。今後の住まいは、居住者の個別ニーズや家族・ライフスタイルの変化にいかに対応できるかが、重要な計画条件となってくるであろう。近年、住宅メーカーも、集合住宅であっても、家族構成やライフスタイルの変化に応じて自由に設計できる商品の開発を進めている。お仕着せの住宅に、何とか自らの生活を合わせて住みこなしていくのではなく、自らの住まいに対する想いを整理し、それをかたちにしていって、そうした住み手主導の住まいづくりが、ようやく拡がり出したともいえよう。

ところで、家族・ライフスタイルの変容によって、専業主婦だけが使うことを前提につくられた家事労働空間も見直されなければならない。日本では、「男は仕事、女は家庭」という伝統的性別役割分業観が長い間支持されてきた。しかし、近年こうした考え方に同感しない人が増加して、夫婦とは共同して家庭生活を営むパートナーであるとの考え方が次第に浸透してきた。家事の担い手は、主婦だけから、夫・家族全員へ

と変化している。家事空間の代表である台所は、かつて「女の城」であるとか「男子厨房に入るべからず」と言われ、女性だけの空間であった。台所は、住まいの中で暗くて寒い北側に位置したが、女性の社会的地位の向上や、火や水の供給形態の変化、美しい家電製品の登場によって大きく変化してきた。女性が作業する場から家族の生活の場へ、隠すべき場から見せる場へと変わったのである。台所は、歴史的にも住空間の中で激変した場である。

家事の社会化（商品化、サービス化など）によって、家事労働の軽減は可能になった。しかし女性が家事に費やす時間が多いことは、統計上も明らかである。家族員の生活が個別化し、在宅時間が短くなる生活スタイルの中で、家事の効率化を図り、家族と共に過ごす時間や、個人の時間を生み出すことは重要なテーマである。共働き家族では、こうした願望はより強いといえよう。とかく雑然としやすい家事空間は、生活の場からクローズドした方が良いという考え方もあるが、見えないということは同時に家事担当者が孤立することでもある。特に、子育て期の家事空間はオープンにし、食事室や居間との連続性や複合性をもたせたい。すなわち家事空間も家族のコミュニケーションの場ととらえ、家事を夫婦や子どもで共有できるようにしたい。アメリカでは、子どもが幼い頃から家族の一員であることの自覚を高められるよう、家事に積極的に参加させる家庭教育を男女共に行う。一方、日本の子どもは特に男子の家事参加率が低いことが問題視されている。子どもにとって、家事参加は健全な発達のうちで大切な生活体験である。家事参加を通して、親子のふれあいを深め、多くの生活規則や習慣が養われ、自立に向けた生活技術を身に付ける良い機会となる。好奇心旺盛な幼児期に、男女共に積極的に家事参加を促す家庭教育を行うことは、性差意識をなくすジェンダーフリーの啓発にもつながるはずである。

家族の個人化傾向が進む現在、家族が顔を合わせやすい空間的仕掛けや、家族が触れ合う機会を意識的に生み出す生活スタイルをつくるのがいっそう重要になっている。住まいは買うものではなく、自ら創り上げるものである。住み手の意識次第で、家族を育む空間創りができるのである。

## ニュージーランドの働く親事情 ～現地調査から～

國信 潤子

国立教育研究所（文部省科学研究費）による「少子化時代の子育て支援策」の国際比較調査をニュージーランドで2000年3月に実施した。ニュージーランドは日本の四国を除いた位の国土に、日本の人口の3割程度が居住している。人口よりも羊の数が多く、美しい自然で日本からの観光客も多い。しかし国内の政治・社会での問題は先住民マオリとの共存政策の困難、経済低迷など問題を抱えている。主な輸出製品は農産物である。特に経済的活気があるというわけでもないのに人々（人口の8割が欧州からの白人移民の子孫）の生活は快適、かつ女性の社会的地位は高く、意思決定機関への参画度も高い。

今回のニュージーランドの子育て支援策調査を実施した訳は合計特殊出生率が2.1～2.2人程度であり、このレベルを維持していること。（ただし白人とマオリの間には格差がある）しかし反面、他の先進諸国に比較して男女賃金格差がある。つまり男性が536ニュージーランド・ドルを一ヶ月に稼ぐが、女性はNZ\$333であり、平均賃金の男女比率は100：62である。また女性の年齢別労働力率がわずかだがMカーブが見られる。これらの要因から日本およびその他の先進諸国との中間に位置すると思われたからである。今回の調査により、これは男女間の働き方、労働領域の差にあることが見えてきた。女性が非常勤、不安定労働であること、また福祉・保健関係に集中していること。この領域は低賃金であることなどである。しかし女性の意思決定機関への参画は進んでいる。他方、日本では現在合計特殊出生率が1.37と激減し、女性の社会参画は低迷している。

どこにその主要な相違があるかといえば、ニュージー

ランドでは子育て支援がきめ細かく、地域で多様な保育サービスを得られることである。働く親あるいは専業主婦（主夫）であっても子育て期間に自分の望む形、時間帯で保育園、幼稚園、プレグループなど、安価で良質なサービスを得ることができる。特にこの20年ほどの間に0歳児からの保育収容施設およびサービスが増加し、集団保育志向が働く両親の間で浸透している。子どもが集団のなかでこそ社会性を学習できること、母親の就労機会が子どもの有無、年齢に関わらずあることが当たり前の社会風潮となっているところが、母親に子育て責任について過重期待をする日本の風潮と大きく異なる。また子育て政策は一環して教育省の管轄下にあることも総合的政策を手早くとれる要因となっている。

最近の保育事情の変化として乳児・児童の身体・心理発達の学問的知識を積極的に社会保育に取り入れていることだ。子どもの人権・安全を重視しつつ、子どもの心理発達を配慮した楽しい学習遊びを取り込んでいる。こうしたEducational Child Centerという施設への入所希望が急増している。その施設も見学したが、外見は通常の子育ての保育園である。日本では数少ないが子どもの自主性をのばすには自由保育が最適であろう。発達心理学などの最新の理論なども取り入れた遊具が多くあり、家庭では得難い環境となっている。学習的要素でも子どもは遊びからこそよく学ぶ。保育専門家はさりげなく次の段階の遊びを子どもに伝える。しかしあくまでも遊びである。働く両親あるいは専業主婦も子育てを母親ひとりの責任と重荷に感じなくてよい環境がそこにはある。（本研究所 所長）



（ニュージーランドの保育施設）

# 今、ASUのジェンダー論、女性学が面白い!!(一般の人でも受講できます) 2000年度前期/後期 愛知淑徳大学、ジェンダー女性学関連の開放講座

## ジェンダーと社会1

開発とジェンダーを考える 2000年前期/後期 毎週火曜日 15:00~16:30

開発協力は現在、民間、政府間の両者によって推進されている。世界最大の政府間開発援助をだしている日本は今開発のあり方について転換期にある。このオムニバス講座では開発ということばの意味、またそのジェンダーとの関わりについて検討する。

5人の講師はそれぞれ開発、ジェンダーの両側面での国際的活動の最前線で活躍する人々である。異なる切り口からジェンダーと開発の関係性について探求する。開発途上国あるいは非産油国と先進国の政治的対立は21世紀の最大の国際摩擦の要因となると考えられる。この講座では南北社会対立にみる資源の不平等分配が男女間(ジェンダー間)でどのように現象化しているかについて事例的に紹介する。学生、さらに一般市民の聴講参加を歓迎します。

日程は以下の通り。

回	前期 月/日	テーマ	講師
1	4/18	開発とジェンダーの関わり	本学教授 國信潤子
2	4/25		
3	5/ 2		
4	5/ 9	開発実践論、開発と女性・ジェンダー	日本福祉大学助教授 生江 明
5	5/16		
6	5/23		
7	5/30	イスラムにおける女性と開発	名古屋大学国際開発研究 科博士課程 星山幸子
8	6/ 6		
9	6/13	日本における外国人労働者問題	共の会事務局長 野上幸恵
10	6/20		
11	6/27	日本の開発援助 - スリランカの場合 -	本学教授 國信潤子
12	7/ 4	開発と女性 - 女性への暴力 -	アジア保健研究所所員 松井やより
13	7/11	持続開発とジェンダー：女性労働の実 態と開発支援	本学教授 國信潤子
14	7/18		

### 後期

1	10/ 3	可能な開発とジェンダーをなぜ今考えるか	本学教授 國信潤子
2	10/10	イスラム社会のジェンダー：トルコの場合	名古屋大学国際開発研究 科博士課程 星山幸子
3	10/17		
4	10/24		
5	10/31	開発実践論、開発現場にみるジェンダー	日本福祉大学助教授 生江 明
6	11/ 7		
7	11/14	ジェンダーと保健(1)	医師、アジア保健研究所所員 川原啓美
8	11/21		
9	11/28	ジェンダーと保健(2)	アジア保健研究所所員 林かぐみ
10	12/ 5		
11	12/12	今、私たちにできることは?	本学教授 國信潤子
12	12/19		
13	1/ 9		
14	1/16		

日程・テーマ及び講師は一部変更になる場合があります。

定員 10人  
教室 321教室(長久手キャンパス)  
評価方法 期末レポート、出席状況、履修態度など総合評価。  
評価 評価全講義回数の2/3以上出席した方には「修了証」を発行します。さらにこの条件を満たした上でレポートを提出して合格した方には、「単位修得証明書」(2単位)を発行します。  
テキスト なし。随時配布資料あり。

### 前期集中講座

- 「女性学・男性学概論2」伊藤公雄(大阪大学教授)
- 「フェミニズム論」伊田久美子(大阪女子大学教員)

この2講座の集中講義に関しては8月・9月なので今からでも申し込み可能です。申し込み先は本学ECセンターです。  
電話052-783-1665

## 編集後記

2000年に新設された都市環境デザインコース(現代社会学部)の新校舎でジェンダーと居住空間について田中恒子、瀧美正子両先生から、住居がいかにジェンダー関係の変容から直接的に影響されるかについて学んだ。またスポーツにおけるジェンダーの問題の深刻な側面もジェニファー・ハーグリーブス先生から紹介された。いずれもジェンダーの新たな領域を見せていただいた。これからも新発見を期待したい。

## ジェンダーと社会2(オムニバス)

毎週火曜日 15:00~16:30  
2000年前期/後期 または 16:40~18:10

本講座では、ジェンダーの視点で文学作品を分析することによって、女/男規範がどのようにテキストに織り込まれているかを読み解き、さらに、テキストがどれほど現実の女と男の生を規定してきたかを検証する。それとともに、ジェンダーの呪縛から開放されたいとして、新たな文学表現を試みる作家・作品をできるだけ多く提示する。

回	テーマ	講師
1	オリエンテーション	中島 美幸
2	ことば とジェンダー	
3	書く女 の登場	
4	書く女 の登場	
5	女性を描く男性作家のまなざし	
6	女性を描く男性作家のまなざし	山下智恵子
7	母と娘の物語	
8	母と娘の物語	
9	家族の物語	中島 美幸
10	文学の政治性	
11	文学と映像文化	
12	まとめ	

日程及びテーマは一部変更になる場合があります。

定員 10人  
教室 813教室(長久手キャンパス)  
評価 評価全講義回数の2/3以上出席した方には「修了証」を発行します。さらにこの条件を満たした上でレポートを提出して合格した方には、「単位修得証明書」(2単位)を発行します。  
テキスト 使用しません。

## ジェンダーとセクシュアリティ

「文学にみる愛とセクシュアリティ」 2000年前期/後期 毎週木曜日 16:40~18:10

近代社会はジェンダー区分を「本質的な」ものとし性差別を温存させてきた。ジェンダーによる男女の二元論を正当化するために利用されてきたのがセクシュアリティである。セクシュアリティもまた「本質的」なものと考えられてきた歴史があり、その立場から「正常な」セクシュアリティが近代社会の道徳となり、そこから逸脱したものは「病理」として普遍化されてきた。両者(ジェンダーとセクシュアリティ)は本来別のものであるが、巧妙に絡まりあっている。

講師/本学教授 小倉千加子  
定員 60人  
教室 星が丘キャンパス  
テキスト 使用しません。

## 映画とジェンダー

2000年前期 毎週火曜日 10:50~12:20

大衆娯楽であるハリウッド映画にはさまざまな「母」が登場する。産む性としてまた養育者としての「母」の表象、あるいは自己犠牲的な「母」や支配的な「母」の描写が、女性のジェンダー構築にどのように関係しているのだろうか。映画の表向きのプロットだけでなく、舞台設定や映像の形式など背後に隠れたところで、母性はどのように強調されたり抑圧されたりしているのだろうか。

講師/本学助教授 平林美都子  
定員 60人  
教室 星が丘キャンパス  
テキスト 特に使用しません。

## 女性学・男性学

2000年前期/後期 毎週水曜日 15:00~16:30

男女についての定説化した知識、それによって作り出された役割、人格の内部に及び性別化の影響とその結果生まれる病理などについて、さまざまな事例や理論を紹介し検討する。

講師/本学兼任講師 井深 淳子  
定員 10人  
教室 721教室 長久手キャンパス  
テキスト 学んでみたい女性学

### 研究所への交通案内

名古屋駅(JR)から地下鉄東山線本郷駅下車(所要時間約25分)  
地下鉄東山線「本郷」駅前バスターミナルより市バスがでていきます。2番のりば本郷にて終点「猪高緑地(大学正門前)までご乗車下さい。

ASU・IGWS2000年度  
運営委員：石田好江、逸村裕、岡澤和世、國信潤子(所長兼) 都築久義

非常勤運営委員：瀧美正子(愛知淑徳大学)  
伊藤公雄(大阪大学)  
伊田久美子(大阪女子大学)

スタッフアシスタント：山田清美

この冊子は再生紙を利用しています。